

クウと友だち

奄美市立名瀬小学校 三年 大野 彩空

あまみのふかい森の中、アマミノクロウサギの家族がいました。母ウサギは子どもたちに言いました。

「あなたたちもりっぱになったから、これからは自分たちで生きていきなさい。明るく前向きに、そして仲間を大切にすることをわすれないで。」

初めに兄ウサギが

「森の仲間と出会えるなんて、楽しみだな。」

そう言うと、森のおくに去って行きました。次に姉ウサギが、

「わたしも、もうそろそろ行くわ。行ってみたい所があるの。」

と言って、兄ウサギと反対の方に走って行きました。一番末っ子のクウも、

「家族とわかれるのはさびしいけれど、ぼくも行ってみよう。まずは家さがしだ。」

と言って、ゆっくりとした足どりで進み始めました。

クウは、少し行つた所でつまずいて転んでしまいました。

「わっ、あぶない。」

クウが、がけ下に落ちそうになったその時、何かがおなかにまきつきました。そして地面にストーンと落とされました。見上げると、木の上にハブがいました。クウはほつとして、

「助けてくれてありがとう。」

と言いました。

「べつに大したことはしてないさ。」

とハブがぶっきらぼうに言いました。

「きみって力が強いんだね。それに体のもようもきれいだね。」

とクウが言うと、ハブはてれくさそうに、

「そんなことを言われたのは初めてだよ。みんなオレをこわがるんだ。」

と答えました。

「そんなことないよ。今日からぼくたち友だちになろうよ。」

とクウはハブに言いました。ハブはビックリしながらも、「もちろんさ。」

とニコツときばを出して言いました。笑顔でハブとわかれると、クウはまた森の中を歩き始めました。さつきよりさびしい気持ちが無くなったような気がしました。

クウは、うれしくなつて鼻歌を歌いながら進みました。

「ピーピーピー。」

すると、クウの歌声に合わせて歌うように、

「ギャー。ギャー。ギャー。」

とどこからか鳴き声が聞こえてきました。

「こんにちは、クロウサギさん。」

とルリカケスがとんで来て、クウに話しかけてきました。

「こんにちは、ルリカケスさん。今のはきみの歌声かい。すてきな声だね。」

とクウが言うと、ルリカケスは、目を丸くしておどろきながらも、

「ありがとう。そんなこと言われたのは初めてだわ。

でもわたし、歌うことは大好きなの。一緒に歌いましょうよ。」

とクウをさそいました。

「もちろん。今日からぼくたち友だちになろうよ。」

クウとルリカケスは、たくさん歌を歌いました。笑顔でルリカケスとわかれると、クウはまた森の中を歩き始めました。さつきより、心が晴れてきたような気持ちになりました。

クウが歩き進めて行くと、向こうからサーサーと水が流れる音が聞こえてきました。クウは、ふしぎに思い、その音がする方へ走って行きました。すると、そこには大きな川が流れていました。

「だれだい、お前さん。見かけない顔だな。」

と声をする方をふりむくと、アマミハナサキガエルがものすごい高さではねながら近づいて来ました。

「ぼくはクウ。すみかをさがしてたびしているんだ。それにしても、すごいジャンプだね。ぼくもジャンプはとくいだよ。」

クウはそう言うと、びよんとはねて見せました。アマミハナサキガエルも負けじと、高くはねて見せ言いました。「お前、面白いやつだな。すみかなら、良い所を知ってるぞ。ついて来な。」

二匹はびよんびよんはねながら、入り口が葉っぱでかざられた小さなほら穴に着きました。

「わあ、すてきな家だね。ありがとう。ねえ、ぼくと友だちになつてくれないかい。」

とクウが言うと、アマミハナサキガエルは、

「ああ、いいとも。」

とびよんびよん高くはねて答えました。クウは、もうさびしくなくなりました。新しいほら穴でねむりにつきながら、明日はどんな友だちが出来るのだろうか。とワクワクむねをおどらせるのでした。